

# 「チベットの死者の書」とは何か

森 雅秀

はじめに

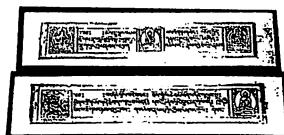
「チベットの死者の書」とは、この書をはじめて西洋世界に紹介したアメリカ生まれの人類学者W.Y.エヴァンス・ヴェンツによる命名である。明らかにエジプトの「死者の書」を意識した名称であるが、死後の世界を克明に描寫するエジプトの「死者の書」の類書とみなすことは適切ではない。正式には「バルド・トエドル」(中有に

おける聴聞による解脱)というタイトルで、「シト・ゴンバ・ランドル」(寂靜尊と忿怒尊の念想による自らの解脱)という文献群の一部を形成している。

「バルド・トエドル」はチベットで死者が出たときに、その枕元で唱える経典である。日本の枕経にあたる。経典の誦誦は死の直後にはじめられ、その後も七日ごとに七回、すなわち四九日間、断続的に行われる。これは死者がつきの生をうけるまでのバルド(中有)の期間に相当する。バルドはわが国では中陰とよばれることも多い

が、文字どおりには「中間の存在」(antarbhava)を意味し、インドをはじめアジアの諸地域にふかく根ざしてゐる輪廻思想に関連する。仏教の場合、すべての生類は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道、あるいは修羅をのぞいた五道の中を輪廻しているが、ひとつつの生からつぎの生に移るまでの中間状態がバルドで、四九日というものはそのもつとも長い場合である。

葬儀における読誦經典として「バルド・トエドル」はチベットで広く用いられているが、經典としての權威がチベットのすべての宗派で認められているわけではない。チベット仏教には四つの主要な宗派、すなわち、一四世紀にツォンカ・パによって創設され、現在ダライラマを宗主とする最大宗派のゲルク派、イングの修行者マルバ、ミラレバを祖とし、一二世紀にガンポバによって組織化されたカギュ派、同じく一二世紀のコンチヨク・ゲルポを開祖にあおぐサキヤ派、そしてこれらの三派がまとめて新訳派とよばれるのに対し、七世紀から九世紀までの前伝期の仏教に根ざすニンマ派(文字



どおりには古派)がある。「バルド・トエドル」の成立と伝播には、このうちのニンマ派とカギュ派が大きくかかわっている。そのため、ゲルク派やサキヤ派のエリート僧たちは、一般に「バルド・トエドル」の内容を正統的なものとは考えていない。また、同じ宗派の中でも学派や系統によっては独自の葬送儀礼や読誦經典をもつことがある、これはニンマ派やカギュ派においても同様である。

「バルド・トエドル」がチベットの精神世界の代表的な文献として広く知られているのは、エヴァンス・ヴエンツの翻訳出版(一九二七年)以来、東洋の神秘思想を求める人々の一種のバイブルとして受け入れられてきたからであろう。とくにドイツ語版(一九三五年)に付されたC.G.ユングの「チベットの死者の書の心理学」は、この書で語られるバルドの体験を人間の深層心理にまで結び付け、その後の本書の方向性を決定づけた。また、近年では、臨死体験との共通性の指摘や、ホスピスにおけるデス・エデュケーションのための教材としても注目されている。ここ数年のわが国での「チベットの死者の書」ブームも、その流れの一部である。しかし「バルド・トエドル」の流行はけつして昨今のものだけではないのである。

「バルド・トエドル」は付属の願文をのぞくと、前半と後半の二部から構成されている。さらに前半はふたつの部分にわかれ、全体が三つの部分からなる。これは、バルドの期間全体を、死後直後の「死の瞬間のバルド」(チカエ・バルド)と、はじめの一週間の「存

在そのもののバルド」(チヨエニ・バルド)、そして最後の五週間に相当する「再生のバルド」(シバ・バルド)の三種のバルドに区切り、それぞれの期間に死者の眼前に展開される光景や、解脱の方法が各部分でとかれるためである。はじめの部分は「死の瞬間のバルドに

おける光明のお導き」と名つけられ、死の直後にあらわれる光明を手がかりに、仏と一体化して解脱する方法が示される。ヨーガ瞑想にたけた者や善業をつんだ者などのための解脱の方法として紹介される。第二の「存在そのもののバルド」においては、柔軟な姿をした四一の仏たち(寂靜尊)と、恐ろしい形相の五八の神々(忿怒尊)がつぎつぎとあらわれ、輪廻からの脱却をいざなう。ここは「バルド・トエドル」の中心的な部分で、大日や阿闍梨などの仏が眷族をひきつれて光明とともに登場するドラマチックな光景は、実際に寺院の境内で演じられる仮面劇の中でも再現される。最後の「再生のバルド」では、これまでの方法でも解脱がかなわなかつたものたちのために、再生への入胎をさける方法と、さらにそれにも失敗した場合、六道の中の上位の世界に生まれ変わるための手段が示される。

### 「バルド・トエドル」の成立

イタリアのチベット学者G・トゥッチは、「バルド・トエドル」の原型となる文献が敦煌で発見されていると述べている。しかし、おそらくこれは「寂靜尊(シ)」と忿怒尊(ト)に関する儀軌(儀札に關する規定書)で、「バルド・トエドル」とは直接關係するものではない。すでに田中公明氏が指摘されたように、敦煌から発掘されたチベット文書の中には、寂靜尊・忿怒尊に関する儀軌が二点ある。また、現在パリのギュメ美術館が所蔵する寂靜尊のマンダラも敦煌から出土したものである。いずれも八世紀から九世紀にかけてチベットの古代王朝吐蕃が敦煌を支配していた時代の遺品である。前伝期の時代にすでに寂靜尊・忿怒尊を中心とした信仰が成立していたことの根拠となっている。しかし、注意しなければならないのは、

寂靜尊と忿怒尊に関するこれらの文献は、いずれも現在みることのできる「バルド・トエドル」と一致することのない儀軌類で、しかも、バルドとの結びつきを認められないことである。

「バルド・トエドル」をふくむ「シト・ゴンパ・ランドル」は、ニンマ派の埋蔵經典（テルマ）のひとつである。ニンマ派では祖師パドマサンバヴァアが数多くの文献を土中や寺院の壁の中にかくして、後世の人々に伝えたという信仰がある。のちに発見されたこれらの経典が「埋蔵經典」と呼ばれる。その多くは発見者自身による創作であつたとされるが、一部には本物の古文書もあつたらしい。「埋藏經典」には土中などから発見された「出土經典」（サテル）の他に、靈感をうけたものが著述した「意趣經典」（ゴンテル）と呼ばれるグループもある。いずれもその発見者や著述者は「埋藏經典掘者」（テルトン）と呼ばれる。「シト・ゴンパ・ランドル」の発掘者はカルマ・リンパという一四世紀中葉の人物といわれる。「バルド・トエドル」のいくつかの奥書によれば、かれが中央チベットの西にあるガンボリ山から発掘したらしい。他の多くの埋藏經典と同様、「シト・ゴンパ・ランドル」も伝説上の祖師パドマサンバヴァアに由来すると信じられている。

現在、流布している「シト・ゴンパ・ランドル」には二種類ある。ひとつは一七の文献から構成されたテキストで、このうちの約四分の一（第一書から第六書と第八書）が「バルド・トエドル」に相当する。さらにこの文献群は、三巻からなる「カナン・シト」（カルマ・リンパの寂靜尊・忿怒尊）と略称される儀軌集の一部になり、全体は三〇点のテキストをふくむ。もうひとつはやはり「シト・ゴンパ・ランドル」のタイトルをもつが、その中には「バルド・トエド

ル」はふくまれない。分量も小さく一巻本で二百葉たらずにすぎない。中にふくまれる文献の数はやはり一七であるが、そのほとんどが寂靜尊・忿怒尊に関する儀軌である。一九世紀にニンマ派の埋藏經典を集成した「埋藏經全書」（リンチエン・テルツ）にも、第三巻にやはり寂靜尊と忿怒尊に関する儀軌が多数ふくまれている。その多くは出典を「シト・ゴンパ・ランドル」と明示するが、やはり「バルド・トエドル」に一致するものはない。また一巻本と共通する儀軌名もあらわれない。

三巻本と一巻本の二種類の「シト・ゴンパ・ランドル」のそれぞれの成立過程は、現在のところ解明されていない。しかし、これらの状況をみると、古くは敦煌文書にもさかのぼることができる寂靜尊と忿怒尊の儀軌が、いくつも伝承されていったことは予想できる。そして、これにバルドの思想を結びつけて、「バルド・トエドル」をその一部としてふくむ三巻本が編纂され、また、これとは別に、いくつかの儀軌を集成した一巻本が作られたり、あるいは「埋藏經全書」にも収録されるようになつたと考えられる。バルド思想との結びつきは、寂靜尊・忿怒尊を中心としたニンマ派の儀軌から読誦經典への転換の契機であった。なお、「バルド・トエドル」はニンマ派の文献であると紹介されることが多いが、その形成や伝承には、むしろ、新訳派のひとつカギュ派がより大きく関与したと考えられる。現在伝えられる三巻本の「シト・ゴンパ・ランドル」はカギュ派の寺院に多く残されている。「埋藏經全書」や一巻本の「シト・ゴンパ・ランドル」が、ニンマ派の伝統の中で伝えられた文献であるのに対し、バルド思想と結びつけ「聴聞による解脱」という役割を与えたのは、カギュ派の人たちであったのかもしれない。実

際、一九七五年にF・フレマントル女史と原典からの英訳を発表したカギュ派の活仏チユギヤム・トゥルンパは、カルマ・リンパ自身はニンマ派の「埋蔵経発掘者」であったが、その弟子のほとんどがカギュ派のものたちであると述べ、自派と「バルド・トエドル」との結びつきを強調している。

「シト・ゴンバ・ランドル」がバルドの思想と結びついた時点で、葬送儀礼において読誦される經典という性格もおそらく付与されたと考えられる。「バルド・トエドル」の全編を通じて「死者のために耳もとで語りかけよ」と何度も繰り返される。しかし、「バルド・トエドル」の部分だけが一貫性をもつて編集されたわけではなかつたようである。「バルド・トエドル」の前半部分、すなわち「死の瞬間のバルド」と「存在そのもののバルド」の部分に付された序論は、この部分だけではなく「バルド・トエドル」全体の序としても機能している。「バルド・トエドル」の本論が三種のバルドから構成されている。「バルド・トエドル」の本論が三種のバルドから構成されると説くのもこの序の部分である。おそらく、もともと独立した文献であつた前半部と後半部を、「バルド・トエドル」の一部として合併したときに、前半部に付属的にふくまれていた「死の瞬間のバルド」を、それ以降の二段階のバルドと対等のものとして位置づけ、「バルド・トエドル」全体を意識してつけられたのがこの序論なのである。序論には「バルド・トエドル」にふくまれている付属の願あろう。序論には「バルド・トエドル」の一七書のうちの少なくとも第九書までは、このときに成立していたことが確認できる。しかし、その一方で「バルド・トエドル」の本文中には「シト・ゴンバ・ランドル」の中にはふくまれない文献の名称も言及されており、成立の複雑さを示している。

「シト・ゴンバ・ランドル」の一節が「バルド・トコドル」として意識されたことは、葬送儀礼と結びついた「シト・ゴンバ・ランドル」が、さらに、よりプラクティカルな僧侶の読誦用のテキストとして「バルド・トエドル」を独立させるための素地となつたようだ。現在、翻訳が発表されている、いわゆる「チベットの死者の書」の形態があらわれたのである。

エヴァンス・ヴエンツが利用したテキストは、カギュ派の僧の家に代々伝えられた絵入りの「バルド・トエドル」であったといわれる。「シト・ゴンバ・ランドル」の全体ではなく、その中の「バルド・トエドル」の部分と、他の小さな付編からなると記している。「バルド・トエドル」のみの写本は東京駒込の東洋文庫にも所蔵されている。紺紙金銀泥の豪華なこの「死者の書」は、特定の死者の追善供養のために製作されたのであろうと川崎信定氏は推測されている。

エヴァンス・ヴエンツはこの写本のほかに、カルカッタのアジア協会にいたJ.V.マーネン所蔵の木版本も用いている。これは三巻本の「シト・ゴンバ・ランドル」であるが、いずれの版本であるかは明らかにされていない。川崎氏の翻訳の場合も、東洋文庫の写本と、シッキムとカム地方の寺院にそれぞれ伝えられた二種類の木版本が用いられている。また、先述のフレマントルとトゥルンパは、川崎氏と同じカム地方の三巻本の「シト・ゴンバ・ランドル」を底本とし、これに三種の木版本を校合したと述べているが、詳細なデータは明記されていない。いずれも、各版や写本のあいだに大きな相違はないといわれる。

すでに述べたように、ポン教にも「バルド・トエドル」というタ

イトルを冠した文献がある。ポン教徒たちも仏教徒にならって、カングュル（直説部）とテンギュル（論疏部）という二大コレクションをたてたが、この内のテンギュルの中のやはり「埋藏經典」のジヤンルに「バルド・トエドル」はふくまれている。ただしテルトンすなわち埋藏經発掘者はカルマ・リンパではなく、一二世紀後半の人物であるタンパ・ランドル・イエーシェー・ゲルツエンといわれ、教えの本来の説示者も八世紀の伝説上のポン教徒テンパ・ナムカート信じられている。テンパ・ナムカーはパドマサンバヴァアの弟子とも伝えられる人物で、「バルド・トエドル」の教えをニンマ派と呼ば同時代の人物に求めていることになる。実際は、カギュ派の中で「バルド・トエドル」が独立してあつかわれるようになってから、その影響をうけて成立したと考えられるが、両者の比較研究は現在のところまだ行われていない。

### 「バルド・トエドル」の内容

#### (1) 死の瞬間のバルド

はじめの序の部分では、「バルド・トエドル」を必要としない人たちのことがます述べられる。生前に特別な修練をしたヨーガ行者は、バルドの期間を経ないで解脱することができる。かつて実修した行法の記憶を、臨終に際してよびおこすことによって、自ら解脱することができる。この行法は「転移」（ボワ）と呼ばれる。したがつて「バルド・トエドル」は転移による解脱ができない人のために説誦される。転移とは人間の身体をつらぬく神経の脈管と、その中を流れる「生命の風」（ルン）を支配して、最終的には、頭頂にある「梵孔」と呼ばれる穴から生命の風を放出する

行法である。インド以来のタントリズムの基本的な身体ヨーガ理論にもとづいている。人間の身体には三三の脈管がそなわっている。このなかでも中央とその左右の三本の脈管がもっとも重要である。一般に臨終において、生命の風は中央の脈管から左右いずれかの脈管に流れ込み、目や鼻、耳など八つあるとを考えられる頭頂以外の穴から放出され、死者はバルドに入ると考えられていた。そのため、転移の実践では左右の脈管への生命の風の流出を防ぎ、頭頂の穴から放出するのである。

死の瞬間のバルドにおける救済も、同じ身体ヨーガ理論にもとづいている。息がとだえた瞬間に死者の左右の脈管をおさえ、生命の風が流入しないようにして、導師は転移を実践する。このとき、導師は死者の眼前に「光」が顕現することを強調し、その光が何であるかを語りかける。これは「根元の光明」であり、「存在そのものの姿」すなわち「空」である。「法身（真理そのものである仏の身体）である普賢」であり、「明々白々な無垢の明知」である。そしてこれを悟ることによって阿弥陀仏（文字どおりには無限の光の仏）と死者は合一し、解脱することができる。導師によるこの語りかけは、生命の風が中央の脈管にとどまっているあいだに行われる。この期間は一定ではなく、生前に善業をつんだ人や瞑想能力のすぐれた人ほど長く、それだけ解脱の可能性も高くなる。

死の瞬間のバルドではもうひとつ解脱の方法が示される。梵孔から生命の風を出すことに失敗し、左右の脈管に入り、頭頂以外の穴から放出されると、死者の意識も体外に出てしまつ。そうすると、死者の生前の業にしたがつて、バルドの幻影があらわれるのであるが、それまでにわずかな時間があると考えられた。このとき、導師

は死者に向かって悟りをえるための「一種のプロセス」のいすれかを実践せよと語りかける。二種のプロセスとは「生起のプロセス」と「完成のプロセス」とよばれるもので、インドの仏教タントリズムにおける基本的な実践方法である。死者がその生前にうけた二種のプロセスのいずれかの記憶をよびおこし、実修することによって、死者の明知が目覚めて解脱できるのである。このときの様子を「バルド・トエドル」の作者は「あたかも太陽の光によって闇がしりぞけられるように、業の支配からまぬかれ『道』が開示され解脱が達成される」と述べ「道の光明による解脱」とよんでいる。

(2) 存在もののバルド

死の瞬間のバルドで解脱できなかつたたちは、第一の「存在そのもののバルド」に入り、さまざまな幻影をみるとことになる。これは、すべて生前の業から生じたもので、自分自身の意識が投影したものである。一週間のこのバルドの期間には、一日ごとにことなる神々が登場する。これらが寂靜尊・忿怒尊である。

第一日目には大日(ヴァイローチャナ)が配偶神である虚空界自在母と交接したすがたで、眷族もひきつれてあらわれる。紺青色の強烈な光明をともなつてゐるため、たいていの死者は恐れおののいてしまつ。同時に魅惑的なかよわい薄明かりもさしてくる。これは六道の中の天の世界からさしこむ光で、死者がこちらに引きつけられるとらわれると、天界に再生することになり、再び輪廻の世界にのみこまれてしまつ。大日から発する強烈な光を仏の世界の叡智であると悟り、みずからを導いてくれる光明であると知るもののみが、大日の心臓にとけ込み、大日の仏国土で仏となることができるるのである。

大日のところにもくことかできり、またアーラムニヨラニヤセレルをなかつた錯乱したもののために、一日目の神々があらわれる。出現の仕方は第一日目と同じである。金剛薩埵と阿埵の神群が登場し、同時にやはり魅惑的な薄明かりもとなつてゐる。これは地獄からさしてくる光である。金剛薩埵は仏眼仏母と交接し、地藏、彌勒の一菩薩、舞女、華女という二女尊をしたがえて、強烈な白い光とともに登場する。もしこの光を金剛薩埵の慈悲の光で、阿闍に象徴される「大いなる鏡のよつな智恵」(大円鏡智)であると知つて、これを強く求めれば、阿闍の仏国土にいたつて仏となる。しかし、薄明かりにまどわされ、引き寄せられると、地獄にいたる。

同じように三日目以降、宝生、阿弥陀、不空成就がそれぞれの眷族を引き連れてあらわれる。そして、いざれもことなつた色の強烈な光をともなつてゐる。宝生は黄色、阿弥陀は赤、不空成就は緑である。この強烈な光が仏たちの智慧そのものであると悟れば、それぞれの仏国土にいたるのであるが、同時に、魅惑的な薄明かりもあらわれるため、もしこれにひきよせられると、順に、人、餓鬼、修羅の世界に生まれ変わることになつてしまつ。

ついに六日目にはこれまであらわれたすべての仏たちと、さらに門衛の八尊、六道を支配する六人の聖仙、そして、すべての仏たちに君臨する法身普賢とその配偶神である普賢母が一団となつて登場する。一方の魅惑的な薄明かりもすべてあらわれる。ひきよせられれば五つの世界にいたる五種の光である。

七日目には持明者とよばれる神々がかわつて登場する。超能力をそなえた半神半人のものたちである。五色の光をともなつてゐる。しかし同時に畜生の世界からの魅惑的な光もさしかかる。

八日目以降は、これまでの寂靜尊にかわって、忿怒尊がつぎつぎに登場する。その前に「バルド・トエドル」の作者は、これらの忿怒尊の存在意義を強調する。どんなに密教のヨーガの修練が未熟なものたちであっても、相手が忿怒尊であればたちまちに判別でき、自分の守り本尊を見つけて近づくことができるという。しかし、顯教（密教以前の伝統的な仏教）のものたちには忿怒尊は恐怖以外のなものも与えないので、悟りがえられず、再び輪廻の世界へとのみこまれてしまつ。多面多臂、しばしば獸の頭をもち、ほとんど裸の姿で配偶神と交接する忿怒尊の姿は、仏のイメージからほど遠いのであるが、これを逆に積極的に評価しているのである。

八日目から一二日目までは、忿怒尊の中心的な五尊の仏が眷族とともになつて順に登場する。ブツダヘルカ、ヴァシュラヘルカなどである。いずれの場合もこの忿怒尊が自分の守り本尊であると知り、一体になれば仏となることができる。一三日目にはガウリーとよばれる八人の忿怒の女神があらわれる。一四日目には四人の門衛と一八人のイーシュヴァリーという女尊たちが登場する。

これで存在そのもののバルドの二週間は終わり、この期間中にいざでもよいから寂靜尊や忿怒尊の神々のもとへといたり、一体となれば仏となつて輪廻から脱却ができる。しかしそれができなかつたものたちには、つぎの「再生へのバルド」が待つてゐる。

存在そのもののバルドで行われているのは、二週間という期間と寂靜尊と忿怒尊百尊との一種の数合わせである。二週間を前半、後半の一週間ずつにわけ、寂靜尊と忿怒尊もいくつかのグループに分類してあてはめる。寂靜尊・忿怒尊百尊は本来はバルドの思想とは無縁の存在であった。そこで「バルド・トエドル」の作者は二週間

に配分できるように、工夫をこらしている。たとえば寂靜尊の場合、中心となるのは五仏と普賢の六尊であるので、七日目には寂靜尊にはよくまれない持明者のグループを出してきている。また六道も七日に配分するにはひとつ足りない。そのため、普賢がすべての寂靜尊をひきつれて登場する六日目には、それまでの五日間にあらわれた五道の光をもう一度利用している。

### (3) 再生のバルド

「再生のバルド」の前半ではこのバルドのありさまと死者の心の状態が延々と述べられる。このバルドでは死者の感覚器官や肢体は完全なものとしてよみがえっている。しかも透視能力やあらゆることを通して通過できる能力などのさまざまな超能力すらそなわつてゐる。しかし、その一方で、死者自身には自分が死んでしまつたという自覚が生じ、心はうつろで、はげしい苦惱もわきあがる。それに加えて、食肉鬼や猛獸、大火、大軍勢などありとあらゆる恐ろしいものが背後からおそつてくる。これらはすべて自分自身の業が作る幻影なのであるが、なかなかかそれ気に気がつかない。そうこうするうちに閻魔大王の前に引き出され、生前の惡行のむきいをうける。からだが切り刻まれたり、肉や骨をしゃぶられるという体験をする。このようなさまざまな光景が展開するのであるが、そのいずれでもよいので、すべては自分自身の業が生みだした幻影であり、空であると悟りさえすれば、たちどころに解脱できるという。あるいは、仏法僧の三宝に帰依し、またひたすら觀音菩薩に祈願すれば、解脱することも可能なのであると語られる。

これに続いて、死者が自分自身の葬儀や法要を見るという一節が

あらわれる。チベットの葬儀は「悪趣清浄タントラ」という經典にもとづいてしばしば行われる。悪趣すなわち六道の下の四つに至ることがないようにという願いを込めた經典である。しかしこの經典が正しく読まれていなかつたり、儀式がいい加減に遂行されているのを死者は見るという。「バルド・トエドル」の作者は、これは死者自身の心の状態が清らかではないからであると強く戒め、疑念をもつものこそ悪趣に至り、僧侶や儀礼の遂行者に絶大な信頼をおくものが、よい生まれかわりを得ると強調する。この部分は、「バルド・トエドル」の全体からみると挿入部分のような印象をうけるが、葬儀を行つ側の論理で話を進めている。

このよつた段階をへると、死者には自分の生前のすがたが次第に不明瞭になり、逆に次の生でうける身体がはつきりし、また六道の世界も薄明かりとなつてだんだん見えてくる。死者は自分自身がよるべのない存在であることを知り、恐怖と悲しみにおいたてられて、新たな生へと近づいてしまつ。このとき、自己の守り本尊や觀音菩薩を祈願し、それがあたかも水に映つた月のように、それ自身の性質をもたない空であると悟ることがもしできれば、再生に至らず解脱ができる。しかし、この段階になつてもまだ解脱することができなかつたものたちには、再生に至る入胎をさける方法しか残されていない。「バルド・トエドル」はその方法を五つあげている。たとえば、その第一の方法は男女が交接している幻影があらわれても、これを配偶神と合体した仏であると心に信じ、ひたすら礼拝し供養せよそすれば解脱することができるといつものである。このほかにもさまざまな方法が語られるが、いずれも目の前にあらわれる光景や人物が、自分自身の心の産物でしかなく、あたかも夢の

「ごとくで空である」と悟れというのが基本になっている。そしてここに至り、「バルド・トエドル」の作者は、この教えであれば死者の生前の能力にかかわらず、ほとんど誰でも解脱できるとまで言いつる。その理由として、前にも述べたよつに、この段階の死者の能力は、生前の状態に關係なく、完全で、生きていたときよりもはるかに明晰で鋭敏になつているからであると述べる。それだからこそ、四九日目までは「バルド・トエドル」を聞かせることが肝要なのである。

最後は、これでも解脱に至れなかつたものたちへの「胎を選択する教え」である。死者は六道の中で少しでもよい生まれを求める忠告をうける。よい生まれとは天か人である。そして人に生まれるならば仏法の広まつた国を選び、生まれる身分はバラモンか王侯として生まれよと説かれる。これは実際の社会の上位階層であるが、釈迦が王侯出身で、未来仏である彌勒がバラモンの出身であることも念頭にあるのであろう。しかし、同時に、悪い業があると錯乱して良い胎と悪い胎の入り口を判断できず、あやまつた選択をする可能性があると警告する。そして、その場合も目にうつるものはずべて空であると観じて、無執着に徹せよということは忘れない。

このようにバルドの四九日間のあらゆる段階で、数えきれないほどの解脱の方法が示され、「バルド・トエドル」の中心部分は終わ

#### ナーローの六法

「バルド・トエドル」は救済のための書である。その全編をつらぬいているのは、輪廻からの解脱の道である。しかし、そこに描かれている世界は、古代的あるいは中世的な再生の觀念に根ざした、一見

荒唐無稽な死後の世界にうつる。それぞのバルドのあいだの関係も、論理的な整合性を欠き、想像の産物の集積にすぎないと見られるかもしれない。「バルド・トエドル」の救済理論をつらぬいているのは、空の確証による悟りである。いかなる段階であっても、そこには、あらわれる仏や神々、光、おそろしい災厄、これらをすべて幻や夢であると見抜き、自分の業を作り出した幻影であると知る。そして究極的には空にほかならないと悟るのである。インド仏教では、空は本来、存在物が実体ではないことを示すネガティヴなことばであつたが、密教の場合、空は修行の究極的目的、すなわち悟りそのものであるというポジティヴなものへと変容している。ここで追求される空も、そのような実体視された空に他ならない。そしてこのようないくつかの空を追求する実修法こそが、じつは「バルド・トエドル」の成立の基盤となつてゐるのである。

「バルド・トエドル」がベースとしているのが、一一世紀にインドにあらわれた修行者ナーローパによる「六法」という教えである。ナーローパ（ナーダバーダ）はカギュ派の祖マルバの師にあたり、「ナーローの六法」もカギュ派の中で整備され、この派を代表する実践方法となつた。ただし、六法を説いたのはナーローパだけではなく、彼と同時代のさまざまな人物名を冠した六法が存在する。またカギュ派以外の宗派でも六法の実践はさかんに行われている。しかし、その中でもっとも有名なのが、この「ナーローの六法」なのである。

「ナーローの六法」とは①内的火、②幻身、③夢、④光明、⑤バルド、⑥転移からなる。これらはいずれも本来は単独の修行法であつたと考えられているが、六法として組織化されると、この順序で実

践され、最終的には空を悟り、解脱することが可能になる。①の内的火は準備段階にあたり、ヨーガによって中央の脈管の基礎部に熱を作り出す行法である。これが②以下の活動源となる。②の幻身は自分自身の姿を鏡に映し、これを陽炎や雲、月影などにたとえ、幻影にすぎないと確証する。③の夢では覚醒している時と夢を見ている時の状態が、いずれも幻影にすぎないと理解する。夢の中にあらわれるもの——この中には仏や菩薩もふくまれる——が、実体をもたないものであると悟る。これによつてすべての現象が「光明」へと姿を変える。これが④の「光明」である。行者はこの光明が空を本質とし、現象世界が展開する前の法身の輝きそのものであると知る。⑤のバルドは実践の過程における行者の仮想的な死である。あるいは、実際の死に際して起ることを疑似的に体験することである。⑥の転移についてはすでに「死の瞬間のバルド」において述べたように、修行の最終的な段階でおこる意識の移動である。前段階での疑似的な死を経た、仏国土へのよみがえりでもある。

①の内的な火は準備段階であるためのぞくとして、②の幻身から「ナーローの六法」もカギュ派の中でも整備され、この派を代表する実践方法となつた。ただし、六法を説いたのはナーローパだけではなく、彼と同時代のさまざまな人物名を冠した六法が存在する。またカギュ派以外の宗派でも六法の実践はさかんに行われている。しかし、その中でもっとも有名なのが、この「ナーローの六法」なのである。

「ナーローの六法」とは①内的火、②幻身、③夢、④光明、⑤バルド、⑥転移からなる。これらはいずれも本来は単独の修行法であつたと考えられているが、六法として組織化されると、この順序で実

●ユリイカ既刊特集一覧●

1 9 9 2	1月号 ● アメリカ・インディアン	3月号 ● ルイス・キャロル	4月号 ● ウィリアム・バロウズ	5月号 ● ジャン・ジュネ	6月号 ● トールキン	7月号 ● E・M・フォースター	8月号 ● マンディアルグ	9月号 ● パロ健二	10月号 ● パウハウス	11月号 ● ベル・エボック	12月号 ● 幻想の博物誌
1 9 9 3											
1 9 9 4	1月号 ● フランク・ザッパ	2月号 ● 島田雅彦	3月号 ● 安部公房	4月号 ● フェリー・ニの世界	5月号 ● 大岡昇平の世界	6月号 ● バルザックの世界	7月号 ● グレン・グールド	8月号 ● フランク・ザッパ	9月号 ● クロソフスキイの世界	10月号 ● フェリー・ニの世界	11月号 ● ダイアモンド
1 9 9 5											
	●滋澤龍彦	●寺山修司	●村上春樹の世界	●禁断のエロティシズム	●大友克洋	●アル・コルビュジエ	●スティーヴ・マラルメ	●ダダイズム	●アメリカン・カルチュア・マップ	●ブルースト	●シェルレアリスト
	●岩佐製本	●宮澤賢治	●宮澤賢治	●エロティシズム	●ピカビア	●オカルティズム	●ゲイ・カルチュア	●ゲイ・カルチュア	●アーティスト	●ダダ・シェルレアリスト	●ダダ・シェルレアリスト
	●宮沢賢治	●魔女	●魔女	●クリント・イーストウッド	●モーティーラー	●モーティーラー	●モーティーラー	●モーティーラー	●モーティーラー	●モーティーラー	●モーティーラー
	●岩佐製本	●ポール・ボウルズ	●ポール・ボウルズ	●ポスト・サイバー・バンク	●ヌーヴェル・ヴァーグ	●ヌーヴェル・ヴァーグ	●ヌーヴェル・ヴァーグ	●ヌーヴェル・ヴァーグ	●ヌーヴェル・ヴァーグ	●ヌーヴェル・ヴァーグ	●ヌーヴェル・ヴァーグ

5月号 ● フランク・ザッパ
6月号 ● 島田雅彦
7月号 ● クロソフスキイの世界
8月号 ● 安部公房
9月号 ● フェリー・ニの世界
10月号 ● セリーヌの世界
11月号 ● 大岡昇平の世界
12月号 ● バルザックの世界
1月号 ● グレン・グールド

編集後記

\*人の死にふれるとき、その生前をおのがまつたく知らぬ存ぜぬ場合、その死は生物学的死の現れとしまして死の現象には登録抹消？ ところが記憶の網膜には映らないもので……脳の皺にその生がくっきりと刻み込まれていたならば、ましておのれの生と終みあつていたなら、RISCチップも恐れいる記憶の捏造の素早さとそして混乱のち涙があふれてくる。あこんなにもあんなにもおのれの生には、生に結びついていたのかなんつかつて。そもそものときに奥から取りだすのはやはり一葉の写真なのだ。写真が物語を想起させるころ、あらためて発覚した死者の生を基にもう一つの物語が紡ぎだされた。そなへて、死の瞬間から死生までのバルードの期間、寂靜はさておき、忿怒にも見舞われる。存在の不快に、それとなへ死を包み込もうとしている心性に気づく。どうしたものかとうたえながら。

④

\*ひたすら耐え忍んだ青春の一時期の思いを、「しのぐ」という一語に託したのは、色川武氏であった。生きるところの死の書でも、死の瞬間から死生までのバルードの期間、寂靜はさておき、忿怒にも見舞われる。存在の不快に、定された因果交流電燈は明滅をくりかえし、罪深い煩惱の塊は自ら境界から溶け出し、(空)に散乱する。一切は繰り起する現象なのだ。そんなにこの世が嫌なのか、それとも、そんな躍進においていかせるほどこの世の執著が強いか、あるいは別の共同体での後ろの世界は自己の投影であつて、がらみごとに個性化の道をとらない。死者にまつわるおびただしい書き物を前に、その共通性に茫然とする。自失するわけだ。——サルヴァ・マンカラム、吉祥あれ！(二)

ユリイカ 12月 臨時増刊号 第26巻第13号(通巻三四四号)  
総特集\*死者の書  
一九九四年一二月二五日発行  
編集人 西口徹  
発行人 清水康  
元東京都千代田区神田神保町一ー九(市瀬ビル4F)  
電話 編集(三一九二二八〇六)営業(三一九四七八九)  
オフセット印刷 デイグ/方英社  
製本 岩佐製本  
定価 一五〇〇円(本体一四五六円)